

---

# 意識術師の時間流動

織宮征

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

意識術師の時間流動

### 【NNコード】

N5645N

### 【作者名】

織富征

### 【あらすじ】

人間に備わっている【意識】という機能を向上させて異能を発揮する者 意識術師。現在ではフリーで、非日常に関する何でも屋を請け負っている皇景一は、四泉一族という意識術師の一族からある依頼を受ける。春先のライトノベル新人賞に応募予定の作品です。

## 始まりの夜

その町での初仕事は、これまでの仕事と熙りし合わせると楽なものだと思えた。

都心から少しばかり離れたとある町。都市開発が発展しているわけではなく、かと言つて田舎じみた田園地帯が広がっているわけでもない。どこにでもある普遍的な風景が見受けられる町だ。

それが、すめいきけいじち皇景一がこの町に抱いた第一印象だった。何の面白味も感じられない……しかし普遍的だからこそ暮らし易そうな町とも思えた。

深夜十一時。オフィス街の高層ビル屋上、フエンスの前に寂然と佇み、彼は夜の町を俯瞰する。高所に居る為か吹き抜ける風は強く、うなじで束ねられた長い黒髪がなびく。

男性にしては肌が白く女性の肌質に近い。身長は百七十センチ後半と言つたところか。白色のシャツの上から黒いロングコートを身に纏っている。

十七歳という年齢にしてはその顔に感情が足りないよう見えた。端的に言えれば無表情だった。と言つても、それは彼の歩んできた人生から生じたものである。

毅然で、酷薄とした無表情は他人に何の影響も与えない。事実、それは彼が所属していた組織の人々も認めていたものだ。

「 近いな」

景一は消えそうな声とも取れる呟きを漏らした。

依頼人であるあの一族の当主の話が嘘偽りのないものだとしたら、今頃、一族の分家の者もこの周辺を巡回しているだろう。

そして、それを完全な事実にするには、分家の者が遭遇し、それをこの目で確かめる他ない。

しかし、あの当主は「これ以上の犠牲を出すわけにはいかない」とも言つていた。その為に自分に依頼をしたようなものだ。ここで

契約を破るわけにもいかない。

元より、この仕事は自分の実力を買つての依頼なのだ。無様に失敗するわけにもいかないが、あの話が真実なのか確かめたいという好奇心も己がある。

(だが、考えている暇はないな)

そう考えている矢先、その気配を察知した。町を俯瞰する彼の眼にはすでにそれは顯現を始めていたのだ。

「……嘘じゃなかつたのか」

多少の動搖を自覚しながら、景一はその場所を視た。この高層ビルから五十メートルほど離れた場所にいるのはそれと、慌てふためきながらも術を使しようとしている一族の分家筋の者だった。結界を張っているところを鑑みれば、まだ一般人への配慮を忘れていないと窺えるが……

(……疑問は残るが、まずはあれの始末、だな)

この矛楯については翌日でも当主に相談すれば良いだろう。そう判断した景一は、高さ二メートルはある金網状のフェンスを乗り越え、その場から地上に向かって高く跳躍した。

「くそ、どうなつてやがる！？」

黒い殺氣を見に纏つている四泉一族の分家筋の人間　四泉貴人しせんたかひとは、ハメートル前方に在るそれから眼中に收めながら、荒ぶつた声を漏らした。

この現状から逃避したくなりながらも、彼は四泉一族の人間としてその考えを即座に捨て去る。

自分と同じく町の巡回を行つていた仲間の術者はすでに死んでしまつた。結界を張つた術者もその内に入つていて。

結論で言えば、術者が死んでしまつた以上徐々に結界の効力は解けていき、残り三分ほどで消滅してしまうという状況だった。

故に、その三分間でこの化け物を殺さなければ一般人に被害が及ぶ。

貴人は、この世の生物とは思えない『影』から目を逸らしたくなるが、そうはしなかった。目を逸らしたら最後、傍らに転がつてゐる一人のように一瞬で影の一部に斬り殺されてしまうだろう。

前方に佇む黒い霧が固体化したような『影』の正体は解っている。これは滅び去つた妖魔、邪靈の残滓がその精神を現世に残し、他の残滓と結合を果たして顯現を行つ『魔的意識体』だ。

魔的意識体自体は、一般的な術者の部類に属する者ならば殺すことは可能とされている。しかし、この魔的意識体はどこかおかしい。当主から任務を授かつた時に聞いたように、普通の魔的意識体とは何かが異なつてゐる。

「くそ！」

貴人は焦りを覚えながらも、自分の殺氣を増幅していく。文字通り、この魔的意識体を殺すという意志を脳内において向上させた。先ほどまで纏つていた黒い殺気が、徐々に変色を成していく。仲間の一人が殺られたという憎悪を正しい感情として意識し、攻撃概念として成立させる。

「意識変革 レベル3！」

この瞬間、貴人の『意識』が常人の三倍に達した。意識という機能を向上させる自己暗示。この手順を踏んだことによつて、全ての感覚機能が最大限に研ぎ澄まされ、己が内界に宿す禁忌あからに触れることが可能となつた。

至高となつた意識は、兼ねて四泉一族の人間が宿す異能との同調を果たす。

貴人の体を纏つていた黒色の殺気が、その色彩を紅色へと変色を成した。

古より伝わる『意識術師』の一族、四泉一族の宿す『意識術』それは殺気の具現化にある。喜怒哀樂という感情を基板とし、『脳内で【意識】した怒りの感情を攻撃手段へと昇華させる技』であった。

この『殺氣意識術』の中でも、赤の殺気はれつきとした上位の退

魔概念として成り立つてゐる。

故に、魔的意識体が赤の殺氣を食らつて消滅を免れることなど叶わない、と貴人は確信した。

貴人は右手の掌を魔的意識体に向け、体に纏う赤の殺氣を開放した。皮肉にも、仲間一人が殺されたことによる殺氣の向上を利用して。

赤の殺氣は右手に集う過程において凝縮し、摂氏一〇〇〇度という大熱量の内包を得て放たれたものだ。それは、四泉一族の『殺氣色彩論』において、赤へと昇華した殺氣は火の元素を宿すことになるが故。

魔的意識体と呼ばれる黒い『影』は、赤い殺氣にあつけなく呑み込まれた。

この時点で、本来ならば魔的意識体が消滅するのが是となる。元より、意識術というのは古来から魔的意識体を滅ぼす為に編み出された秘術であるからだ。

故に、四泉一族の上位概念 必殺とも言える赤の殺氣が勝利の一撃となるのは自然の摺理といつても過言ではなかつた。

「な

だからこそ、上擦つた声を上げた貴人の狼狽は本物だつた。

黒い影 魔的意識体と呼ばれる存在は滅びていなかつた。いや、正確に言うならば……

「俺の殺氣を、喰つてる、のか……？」

分かる。自分が作り出して放つた攻撃だからこそ理解できる。この魔的意識体は赤の殺氣を吸收し、我が物にしている。

その証拠が、今現在の魔的意識体を保つてある存在的な色だ。存在を象つていた黒い影は燃えるような赤へと変色し、まるで大型の火の玉を連想させる形状になつていた。

「…………」

魔的意識体が呪いめいた音を発した。ノイズが掛かつたような雜音だつた。その音が余韻を残さずに風邪に溶けた瞬間、魔的意識体

は影の中心部位から大熱量の炎を放った。

「ひ　つ！」

吸収した火の元素が、逆に貴人へと襲いかかる。

貴人が放つたような低範囲の攻撃ではなく、幅十メートルはある攻撃。それはまさしく火の海だ。食らつたら跡形もなく溶解するであろう魔の炎に、貴人は為す術もなく呑み込まれようとしていた。

「世界の意識よ、その理を変えろ」

しかし、その時。この局面に侵入を果たした『一つの意識』によつて事態は大転換を成す。

誰かが唄うようにそう呟いたのだ。女性とも、男性の声質にも取れる中性的な音色だった。

瞬間、貴人に襲いかかった火の海がその勢いを止めた。

否　これは『止めた』や『静めた』などという表現は全く適切ではない。

時間が殺され、世界の理が変化したのだ。

「結界が維持されていたから可能だつた」

貴人の傍らには、いつの間にか黒いロングコートを羽織った少年

一族の当主が雇つた皇景一が超然とした様で佇立していた。

「消失まで残り一分二十三秒の『意識結界』<sup>いしきけつかい</sup>。その所有権を奪つた。見た限り……普通の魔的意識体じやなさそうだな」

漆黒の瞳が魔的意識体と中空で停止している炎に向かられる。

その、この状況で明瞭なまでに平静を保てている景一を、貴人は憎むような目で睨めあげる。

「なに安心しきつてんだ！　仲間が一人殺られたんだぞ！？　雇わ  
れの身ならもつと早く来やがれ！」

半ば以上本気で涙目になりながら、貴人は声を荒げた。

その言葉に、景一は冷めた視線を背後に向けた。

「魔的意識体が存在の一部を刃に変えて、攻撃を回避できずに斬り殺されのか。それは不運だったな。だが……」

もう興味がなくなつたと言わんばかりに前方に向き直り、景一はこう断じた。

「弱かつたから死んだ。それだけのことだ」

「あ、あんた……！」

「俺の仕事はあんたらを守ることじゃない。『犯人』の始末だ。だからあんたらと慣れ合つつもりは毛頭ない。それと、あんたとの話を長引かせるつもりもない」

景一が強引に奪つたこの意識結界の種類は、ただの人払いの結界だ。所有権が自分に渡つたが故に時間の停滞を行えたが、こんなチヤチな結界では魔的意識体がいる範囲の停滞がやつとなのだ。

「……だが、死んだ術者が残した一分二十三秒を無駄にはしない。とりあえず、殺した時間を再開させるぞ」

景一は右手を肩口辺りまで上げて、指を鳴らした。

同時に、魔的意識体の放つた炎が動き始めた。以後の一秒で、景一と貴人に覆い被さるように炎が接近した。炎に呑まれて絶命するまで、残り〇・五秒といったところか。

しかし。

「意識変革、レベル3」

景一はその結末を否定し、結果を逆転させた。

「意識結界の所有権を奪取し、時間の流動変化を開始」

覆い被さつた炎が、ビデオテープで巻き戻されるように後退を始める。

「有る筈だつた結果を【意識】し、流動する時を逆転する」

瞬間、轟！　という轟音と共に、魔的意識体は自身の放つた炎に呑み込まれ、意識の消失、……絶命へと至つた。

「な……これは、一体……」

その一連の光景を目の当たりにした貴人は、現実を直視できず、

だらしなく口を開けて啞然としていた。

「意識結界が解けるまで、残り三十秒といったところか」

対照的に、景一はこの結果を当然の幕引きだと受容し、踵を翻す。

「明日はあんたらの屋敷に邪魔するつもりだ。早く帰つて当主に伝えろ。もっと使えるヤツを用意しろってな」

神経を逆なでするような台詞だが、一人残された貴人は呆然としながら無意識に頷いていた。

（これが）

そう、これが皇景一の実力。

先ほどの流れは、もはや戦いではない。ただの一方的な勝利に過ぎないと実感し、貴人は確かな恐怖と戦慄を覚えた。

そう、これが。

現存する意識術師を束ねる組織の元最高幹部 【時の調律者】ちゅうりつしゃ

と呼ばれていた者の力の一片であつた。

四泉一族は、古より意識術を行使できる素質がある乳児が生まれてくる。才能という要素を除き、その確率は一族が始まった一千年前より一〇〇%を維持してきた。

四泉一族だけが用いる唯一無二の意識術　『殺氣意識術』を使用する為、殺氣という感情を覚え、その力を御しきるだけの自制心を己が内で成立させる。それが四泉一族で生まれた者の責務と言えた。

故に、その殺氣意識術という非現実的な異能<sup>ちがい</sup>を行使でき得る四泉一族は日常世界を守護する役目をも担っていた。

そして、つい最近になって、その役目を存分に發揮する事態<sup>じたい</sup>が発生した。

それが、この町における魔的意識体の異常なまでの大量発生、そして生半可な意識術師では滅することが不可能という現実であった。しかし、その原因と呼べるもののが自分達の一族に有るといふことを、彼らはまだ知らなかつた。

その日の朝、四泉一族の者が暮らす屋敷の内部　大きな庭園となつてゐる場所に、その少女はいた。

小池の手前に腰を下ろしている、巫女装束を違和感なく身に纏つた少女だつた。肩より少し下辺りまで伸びてゐる黒縄のような直毛が風で静かになびく。顔の造型もこれまた出来すぎていて、日本中の女性が羨むようなきめ細やか純白の肌に小さな顔立ち。鼻筋もしつかりと通つていて、栗鼠のように大きな瞳は目尻を垂らして細められ、桜色の口元には薄い微笑を刻んでいた。身長は女性の平均値より少し高めで百六十センチはあるだろう。

すらりと伸びた長く細い両脚を池の水部に浸けて、冷めた水温を肌で感じながら楽しそうにちゃぶちゃぶと動かしていた。

これが四泉一族の直系、四泉碧海の朝の恒例行事であった。

自然の趣をその身で直に感じ取り、心身ともに清らかな気持ちにさせる。ここ最近では物騒な事件が連発しているが故か、こうして落ち着いた時間を設けるのも一苦労だった。

不意に聞こえてきたチチチ、という動物の小さな轡りに俊敏な反応を示した碧海は、ゆっくりと顔を上げる。見ると、小池の反対側に植えられている樹木の小枝で一匹の小鳥が羽を休めていた。

「 おいで」

胸の近くまで右手を持ち上げ、細く白い人差し指をピンと伸ばした。碧海の眩きに反応した小鳥は羽を羽ばたかせ、放物線を描きながら彼女の指に足を乗せる。

そろそろ成長期に入するであろう小鳥の丸い目を見つめ、碧海は「 そう」と柔和な笑みを浮かべる。

「 親鳥とはぐれちゃったのね。じゃあ、私も一緒に捜してあげる」  
小鳥にそう言った碧海は、静かに双眸を閉じて意識変革を始めた。ここで言う意識変革とは、意識術行使する為のものではない。確かに己が内にある意識術ちからを使役するには意識変革の起動が必要不可欠とされるが、それはあくまで『 戰闘用の意識変革』である。

対して今、碧海が行なっている意識変革は『 日常で頻繁に使用する意識』つまり身体の感覚器に対する意識レベルの向上だつた。碧海の意識は、すでに至高体験レベルにまで達していた。聴覚に全意識を集中させ、この周辺に存在する鳥類の『 鳴き声』の本質を聞き取り、生態としての種類を選別し、親鳥と思われる呼び声を感じ取る。

この時、常人を遥かに超越した聴覚によつて、碧海は周辺に居る鳥類の位置を完璧に鳥瞰していた。

「 .....見つけた」

再びゆっくりと両眼を開き、自分の座つている向きから西に首を向ける。

そして、人差し指に佇立している小鳥に伝え事を行つた。

「ここから西南、四十五メートルの座標にあなたのお母さんがいるわ。自分で飛んで行けるよね？」

可愛らしく小首を傾げ、そう訊く碧海に 小鳥は小さく頷いた  
ように見えた。

小鳥は羽を羽ばたかせ、碧海の指定した場所に向かつて飛翔して  
いった。

「ばいばい」

小鳥の乗っていた右手を振りながら、碧海は笑顔で別れを告げた。  
「さて」

と、碧海は水部に沈めていた両脚を池の外に出して、隣に置いて  
おいた白地のタオルで水気を拭き取り、下駄を履く。

「そろそろかしら」

自分の体内時計が狂つていなければ、もうじきこの屋敷に宗主の  
雇い人が姿を現す筈だ。当主とその付き人の話を傍聴した辺り、自  
分と同い年の少年であるとか。

その、『非日常に属する同い年の少年』という辺りに碧海は興味  
を持つていた。しかしそれは通っている高校が女子高であるから、  
一族の人間の中に近しい歳の子供がないから、という意味合いで  
の心境ではない。

その少年は、世界に存在する全ての意識術師を束ねる組織 意識術師達の總本部と呼ばれる『創世の塔』において、若干十六歳で最高幹部に抜擢された過去を持っているらしい。今では非日常に関する事件の解決を請け負う、フリーの何でも屋を営んでいるようだ。  
しかし事実、碧海が注目しているのは創世の塔における最高幹部であったことではなく、その後の話……なぜ、最高の地位を与えられたにも拘らず、フリーの何でも屋など當むようになつたのかであつた。

その、普通の意識術師ならば最高の名誉に値する人生を自ら捨てた理由。それが気になって仕方がなかつた。

「……まあ、それは私も同じか」

自嘲氣味に薄い笑みを浮かべながら、碧海は屋敷の縁側まで足を運ぶ。左右に重心がブレない、体の中心線を保つた完璧と言える歩法だった。

縁側で脱いだ下駄を綺麗に揃え、裸足のまま、木造の廊下を歩き始める。それなりに年季の入った屋敷なのか、歩みを進める度に床が小さく悲鳴を上げた。

しかし、それも愛嬌があつて良いものだと思つてゐる辺り、碧海はこの生まれ育つた屋敷を好きでいるようだ。

昨晩、碧海が四泉一族の現宗主から命を受けたのは深夜二時を回つた頃だった。何でも、「明日の午前八時丁度、私の自室に来なさい。会わせたい者がいる」とのことだった。

その日の夜は、街に出没した魔的意識体の抹殺任務で碧海は心身ともにそれなりの疲労を被つていた。故に昨夜、宗主から聞かされた話は今日の朝になるまで忘失状態だったのだが、なるほど、考えてみれば、自分と会わせる者など付き人と話していた皇景一という男に違いないだろう。

宗主が何を考えているのかまだ完璧に理解してはいないが、あの父親のことだ。良からぬ計画を企てていても何ら不思議ではない。

「

そういう思考を走らせてゐる内に、宗主 父親の自室の前に辿り着いていた。明らかに他の部屋とは違つた高価たかそうな襖を扱つており、その向こう側からは源三の声と、男性とも女性のものとも取れる中性的な声が聞こえる。

(……もう來てるのかな?)

と、不意に思った疑問を口には出さず、碧海は姿勢を正して、襖の奥に呼びかけた。

「碧海です。宗主、お入りしてもよろしいでしょうか?」  
『入りなさい』

一拍の間の後、低い声でそう許可が下つた。

碧海は「失礼します」と控えめな声で言い、両手を取つ手に掛け  
て、静かに襖を開けた。

そこには、この四泉一族を実質的に支配している実の父親 四  
泉源二と、黒いロングコートを身に纏い、胡坐を搔きながら無愛想  
な表情を浮かべている少年の姿があつた。  
こうして、二人は邂逅であつた。

努力で力を極めた少年と、才能で力を極めた少女の初対面であつ  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5645z/>

---

意識術師の時間流動

2011年12月20日17時48分発行